

図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2017. 3.15

主な内容	頁
「防衛の務め」	幹事 岸川 公彦 (545)
教官推薦図書を紹介	地球海洋学科 岩崎 杉紀 (548)
教官推薦図書を紹介	戦略教育室 中澤 信一 (550)
図書館からのお知らせ	(554)

「防衛の務め」

幹 事

陸 将 岸川 公彦

先日(2016年12月)、2016年の学校行事を締めくくる競技会として「ビブリオバトル」が開催されました。防衛大学校学生の読書意欲の高揚を図ることを目的として行われている本競技会も、今年度で第4回目となり、今や防衛大学校の伝統的な行事として定着しつつあります。その内容も、年を追うごとに充実しつつあり、今年度は第3大隊が見事優勝を遂げました。その表彰式において、國分良成学校長より、池田潔氏の著書「自由と規律」を紹介しつつ、「良書に巡り合うことの重要性」そして「防衛大学校における自由と規律の意義」等につい

て話がありました。既に多くの皆さんも本書については、十分にご承知とは思いますが、同氏は、イギリス文学のご専門で慶應義塾大学において教鞭をとられた方で、その代表作の一つである本書「自由と規律」は、戦前イギリスのパブリック・スクール等で学んだ著者の経験に基づき、自由の重要性や自由を守るための規律の必要性を説いた名著と言えます。そのエッセンスは、著書の中で引用されている著作者の恩師である小泉信三先生の言葉に最もよく表れていると思います。それは、「かく厳正なる教育(イギリスのパブリック・スクールの教育)がそれ

によって期するところは何であるか。それは正邪の観念を明らかにし、正を正とし邪を邪としてはばからぬ道徳的勇気を養ひ、各人がかかる勇気を持つところに、そこに始めて真の自由の保障がある所以を教へるところに在ると思ふ。」と言う言葉です。まさにここ小原台において我々が目指している学生に対する資質教育の究極的な狙いそのものだと思います。その小泉信三先生は、もちろん皆さんは同先生が防衛大学校「三恩人」の一人でもあるということは承知とは思いますが、著書「読書論」の中で、「人生は短く、書籍は多い。」とも述べられています。まさに皆さんは、ここ小原台で「自由と規律」をはじめとする防衛大学校学生として必要な資質を身につけるため、良書に巡り合いその良書に親しまなければならないのです。このような観点から、今回幹事である私から是非とも推薦したい書は、初代学校長であった榎智雄先生著「防衛の務め」です。本年（2017年）年頭に行われた学校長訓話はもとより、1月22日付けの日本経済新聞（「リーダーの本棚」）においても、学校長より、本書の薦めがなされたところであり、既に多くの方も、幾度となく本書に接していることと思いますが、今回敢えて推薦することとします。



本書については、既に数多くの諸先輩等から数多くの場で紹介されていますが、榎学校長が、1953年に開校した保安大学校から12年間の在学中に行った卒業式をはじめとする各種機

会を捉え行われた式辞、講話や随筆約三十数章を一冊の書として取りまとめたものであり。将来幹部自衛官を目指す本校学生に対し防衛のあり方を語り、本校においていかに学びそして修養するかを論じたものです。このような意味から、本書は本校学生はもとより我々指導者（教官）等にとっても極めて貴重な書と言えます。五百旗頭前学校長の言を借りれば、「書は民主主義時代における自衛隊のあり方について豊かな考察がなされており、自衛隊そのものの精神的拠点を示す意味を帯びている。」と評価されています。

このような中、私にとって、特に印象深く感じた箇所について数点取り上げるとすれば、以下の点を挙げたいと思います。皆さんはどのように感じられるでしょうか。

まず最初は、榎先生が、本書を通じ、自由主義国家における防衛のあり方について、その意義や道徳性（「抵抗の道徳性」）、さらには国家あるいは社会の一員としての名誉、責任そして義務等について、多様な観点から説得力をもって説いておられる点を挙げたいと思います。17世紀のフランスの思想家であるパスカルを引いて、「力と正義」について、「正義は力なくしては空虚のものであり、力も正義なくしては暴力に過ぎない」と語り、また欧米の由緒ある士官学校の理念を引いて万国共通である国家に奉仕する者の名誉・義務としての「ノーブレス・オブリージュ」について説き、さらには19世紀イギリスの哲学者であるブラットレーの一章である「わが部署とその務め」を引用し、防衛の持ち場を与えられた者として、その役割を果たすことへの責任・義務などについて、我々に力強く語りかけておられます。これらは、民主主義下の国防の意義とその名誉を切々と語るものであり、防衛大学校の学生が、将来の我が国防衛の任務を遂行するにあたっての根本的かつ基本的な理念や倫理を理解する上で極めて示唆に富むものであると思います。

その二つ目は、先に述べた自由主義国家における防衛の意義や道徳性等を踏まえた上で、その役割を果たすために設立された防衛大学校の目的、意義そして役割等について、極めて明快に述べられている点です。榎先生は、防衛大学校の目的を、将来の自衛隊幹部たる人を養成するところとして明確に位置付け、学生に対して、①立派な社会人の一人であるとともに有用な国民の一人であること、②立派な部隊幹部であること、そして③立派な学識を持つ人たることを目指すべき目標として示しつつ、知育、徳育そして体育の3つを重視しつつ、そのバランスのとれた修養に努めなければならないと語りかけておられます。

また、幹部候補生学校との相違に着目し、「幹部候補生学校は、初めて自衛官教育の専門課程が始まる場であり、他方防衛大学校は、その一歩手前の広い教育課程を履修する場である。」とその違いを明確にしつつ、そのうえで、防衛大学校においては、「自衛官の専門教育に踏み出す前に、将来の職域を強く意識しながら、まず人としての修養を積み、その個人の中に知能と精神力を呼び起こし、その選んだ道に進み、かつ伸びていく鍛錬を行うところである。」と述べ、進展性のある豊かな人間性を育成することの重要性を特に強調しておられます。これらは、ここ小原台における勉学、学生舎生活そして校友会活動の三本柱を通じた、実践を重視した教育・訓練に脈々と引き継がれているものと言えます。

その三点目は、学生舎生活の意義そしてあるべき姿について明確に述べられている点を挙げたいと思います。榎先生は、「ここ小原台の地において市井の巷から離れて、学生舎内に起居して行う組織化された団体生活は、幹部自衛官の修養とは決して離しえない歴史上並びに理論上の意義を持っている。」と位置付けた上で、「作法は人を作る。」(Manner makes man.)と述べ、学生舎生活の本質は、作法を通じた人作りにあると明確に指摘されています。そして、

その学生舎生活のあるべき姿、特にそこでの「自由と規律」について、「その学生舎生活には、規則があり、放縦気ままに振る舞う意味での自由は制約され、規律と礼節は厳格に行わなければならない。そして理性と尊い感情は重んじられ、服して威信を傷つけぬ慣行は伝統となって、これを生活の誇りとするに至るのである。孤立孤独では得られない社会性と人間性を獲得して意義深い共同生活の環境が作られるのであります。しかもこの共同生活は個性をも喪失させるものではなく、むしろ個人に真の自由を与え、自信と闘志を雄湧かせ、友情と愉快な雰囲気の中に生活を営ませるのであります。」と述べられています。これこそ、ここ小原台において、学生の皆さんが日々目指している学生舎生活のあるべき姿を見事に言い表した言葉だと思います。

最後は、防衛意欲の昂揚のために日々鍛錬しなければならない徳目について、具体的かつわかりやすく述べられている点を挙げたいと思います。先生は、冒頭述べた防衛の持ち場を与えられた者が、その義務を果たすためには、防衛意欲の昂揚が必要であり、そのために鍛錬されなければならない基本的な徳目として、「正直であること」「誠実を尽くすこと」「服従できること」「人を尊敬すること」の四項目をあげられています。

これらは、まさに榎校長が尊敬してやまない小泉信三先生が、その著書「任重く道遠し」において、論語の教えの一つである「夫子の道は忠恕のみ」を引用しつつ、①常に真実を語れ、②物事を他人の身になって考え得る人になれ、③感謝を知る人となれ、④己の非を認める勇氣を持ってと諭し、「誠実と思いやり」の重要性を特に強調されていることと軌を同じくするものであると思います。まさにこれらの精神は、我々の学生綱領(「廉恥・真勇・礼節」として、見事に今に連綿と受け継がれているのです。

まだまだ印象深い点は多々あると思いますが、書面の都合もありこのあたりで筆をおくこ

ととします。昨年夏、望外の機会により、母校防衛大学校の幹事という職を与えられ、改めて本書を手に取り、三十数年前の自らの姿に思いをいたしながら、読み返してみました。そして今回このように私なりに感じたところを縷々書き綴ってみました。本書は、皆さんが今後の幹部自衛官としてのそれぞれのキャリアを経験していく上で、極めて有益でかつ示唆に富む珠玉の言葉で満たされており、まさに「幹部自衛官にとってのバイブル」といっても過言ではない書といえると思います。学生のみなさん、是非

とも一度本書を手にとっていただきたいと思います。皆さんからの私に対するご批判をお待ちしております。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所

- ・「防衛の務め」
- 391. 81-Ma34
- (1階 入り口付近 書架)

〜〜〜〜〜〜〜〜〜教官推薦図書の紹介〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『気候工学入門』

杉山 昌広 著 日刊工業新聞社

地球海洋学科 准教授 岩崎 杉紀



二酸化炭素の排出量は減らない。その濃度は確実に上昇している。そうならないよう、パリ協定（日本が批准に遅れたとニュースになっているので聞いたことのある方も多だろう）など、さまざまな取り組みが行われている。しかし、それでは不十分かもしれない。海洋がすでに温まっているので、二酸化炭素の排出を全くしなくなっても産業革命前の気温に戻るには1000年以上かかるという数値研究がある(*)。

ではどうしたら良いのか。その一つの解になるかもしれない技術が本書が紹介する気候工学である。気候工学（ジオエンジニアリングとも言われる）とは、強制的に気温を下げる技術のことである。

本書は、気候工学の背景を解説したのち、太陽光を地球に入ってくなくする手法と大気中の二酸化炭素を除去する手法について、主な研究をそれぞれ数例ずつ紹介している。

詳細は本書を読んでもらいたいが、ここでは最も費用対効果が高い気候工学である成層圏に微粒子を散布する手法を簡単に紹介する。エルチヨンやピナツボなどの大きな火山が噴火した後、地球の平均気温は必ず下がる。これは成層圏（高度15km以上）に小さな粒子が大量に散布され、それらが太陽光線を遮るためである。対流圏では微粒子を撒いても雨で除去され効果はすぐに無くなる。しかし、成層圏は雨が降らないので1年程度は効果が持続する（撒く粒子

の大きさに強く依存する)。成層圏に微粒子があることがポイントとなる。本書では紹介していないが、この研究では数値計算も進んでいる。

「核の冬」をご存じだろうか（自衛官であれば知らなければならない基礎知識）。核戦争が起きると世界中で気温が下がり日射が弱くなり穀物が育たなくなる。核戦争によって世界的に冬がもたらされる。これは火災によるススが成層圏に大量に供給されることにより起こる。冷戦時代に活発であった研究であるが、現在でも行われている。この核の冬の数値シミュレーションは気候工学の研究にそのまま適応できる。このように、成層圏に微粒子を散布すれば地表面が冷えることは、現象論的にも理論的にも知られている。単に散布するだけなので、費用も安い。諸説あるが、年数千億円ほどで気温を冷やすことができる。アメリカの大金持ちならポケットマネーで何度も実施可能である。国家予算からしたらはした金である。

これ以外に低層雲を増やす方法（低層雲が多いと入射する太陽光を反射しやすくなる）、海洋に鉄を撒く方法（海洋中の植物プランクトンの光合成が活発になる）、木材などで発電し発生した二酸化炭素を貯蔵する法、といった主だった気候工学の手法を紹介している。もちろんこれらの手法の問題点も紹介している。例えば、気候工学を実施すれば雨が降りやすい地域（穀倉地帯など）が変わる可能性がある。

これだけ見ると、気候工学は理系の研究が主のように感じられるかもしれない。しかし、倫理的側面や実施するにはどのように進めるべき（ガバナンス）について多くの研究がある。2014年に行われた第一回気候工学の国際学会（Climate Engineering Conference）に私が参加したときは、その研究のほうが多かった気がした。気候工学は文系の研究テーマでもある。実際、本書では、気候工学の手法の紹介ばかりではなく、それらを実行したときの費用の試算、気候工学に対する多くの意見の紹介、ガバナンスについても多くのページを割いて解説している。

本書は気候工学の全体を平易な言葉で中立的に語られているので、この1冊で偏見なくすべて理解できる良書である。

なお、2016年12月現在、気候工学の和書は本書を含め2冊出ている。もう一冊は水谷広著の「気候を人工的に操作する」である。この本は気候工学に批判的に書かれている。ただ、この本を読むと、気候工学の研究の百家争鳴の具合が分かると思う。一見すると（よく考えても）荒唐無稽のように思われる研究まで紹介されている。これは、気候工学の決定打がまだ誰にも分からないことを意味している。

本書がすぐに手に入らない場合、「ジオエンジニアリング」で検索掛けると、杉山氏が電力中央研究所にいた時に書いた一般向けの論文（PDF）が最初に出てくる（QRコード参照）。それを読んでさらに興味を持ったら本書を読む、でも良いかもしれない。

20年前は温暖化の話など巷では全く聞かれなかった。しかし、今では子供でも知っている。気候工学は今は無名である。しかし、気候工学の研究は進んでいる。将来、異常気象が無視できなくなれば社会を巻き込んだ一大論争になるはずだ。学生にはぜひ読んでもらいたい本である。

* インターネットなどには地球の温暖化は間違っていると解説しているページがある。逆に地球の温暖化の説明を明らかに間違っているページもある（一部上場の企業や研究所のページさえ間違っていることがある）。丹念に根拠を調べたり考えたりすれば、門外漢であっても、論理的思考ができる学生であれば誤りが分かると思う。そのためにもしっかり勉強してもらいたい。

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所
（地階 工学図書コーナー 519-Su49）



杉山氏が書いた気候工学の解説（PDF）。

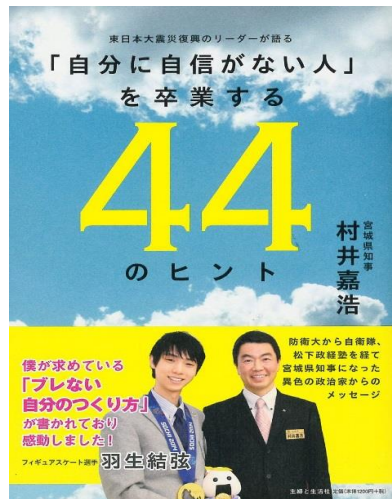
<https://www.cman.jp/QRcode/>で作成した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜**教官推薦図書**の紹介〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『「自分に自信がない人」を卒業する44のヒント』

宮城県知事 村井嘉浩（防大28期）著

主婦と生活社



著者経歴

宮城県知事。1960年8月大阪府豊中市生。私立明星高校出身。
1984年防衛大学校(28期機械工学専攻)卒業後、陸上自衛隊に入隊。
東北方面航空隊(仙台市霞目駐屯地)で回転翼操縦士として精励。
その後、自衛隊宮城地方連絡部募集課に異動。当時、PKO法案国会審議等での武器使用に関する論議を聴き、政治から変えねばと一念発起して退職。(財)松下政経塾に入塾(13期)1995年同塾を卒業後に宮城県議会議員に立候補し初当選。
2005年まで宮城県会議員を3期務め、同年宮城県知事選挙に出馬し当選。
2011年3月11日に発生した東日本大震災では、発災直後から強いリーダーシップを発揮し復旧復興の指揮にあたり、現在3期目。
趣味はウォーキング。座右の銘は「天命に従って人事を尽くす」

戦略教育室 准教授 中澤 信一

防大卒業アルバムのコメント



「頓挫な生活に忙殺されながら隷属することもなく、停顿しながらでも確実に満足できる糧を見いだしたこの4年間。

私は鼓吹したい”防大はすばらしい所だ!! “

本書は、防衛大学校～自衛隊出身の宮城県知事として東日本大震災復興のリーダーを務める同期の村井嘉浩君が、「自分に自信がない人」「人づきあいが下手な人」「仕事で結果を出せない人」に向けて、自身の経験から得た生き方のヒントを具体的に説いた自己啓発書である。特筆すべきは、自衛隊退職後に出版関係に勤める同期への冗談(本人談)がきっかけで出版されたことであるが、その時の裏話は、後ほど紹介する。

内容紹介

著者は、本書『前書き』の冒頭、「幼い頃から私の周りには、常に優秀な友人がたくさんいました。そうした中で、私は特に運動ができるわけでもなく、勉強ができるわけでもなく、女の子にモテるわけでもない。逆に「自信がない」というコンプレックスを持っている人間でした。そんな私が、曲がり

なりにも県庁のトップとして、あの東日本大震災からの復旧と復興を担うことができているのは、政治家になる前の十五年間（防衛大学校、自衛隊、松下政経塾）で心身を鍛練できたからです。」と始まり、さらに

「親に甘やかされて育った私は防衛大学校に入って大きなカルチャーショックを受けました。大学はすべて全寮制です。同じ部屋に四年生から一年生までがいて、起居を共にしています。入学して半年後、部屋長（四年生）主催の部屋会があり、その日は居酒屋で鍋を囲んでの会でした。

部屋長から「遠慮なく食べてくれ」と挨拶があったので、御言葉に甘えてご馳走になろうと思い、一番先に「いただきま〜す！」と箸をつけたのです。途端に二年生から「バカやろ〜、何やってんだ。一年生は最後に箸をつけるものだろう！」と激怒され、二時間ずっと怒られっぱなし……。終生忘れることのできないさんざんな部屋会になってしまいました。このように性根を叩き直されることから私の防衛大学校生活はスタートしました。」とあるように、防大生なら誰もが経験したような話題を交えて書き綴っているのです。きっと共感できるはず。

本書は4章構成になっている。

第1章は「己を知る」・・・「自分自身をよく知り、どう向き合うか」を

02 要領は悪くてもいい〔防大学生舎生活経験談から〕

03 「普通」は武器になる〔松下政経塾経験談から〕

05 「我(が)」を捨てて「下(げ)」で生きる〔後援会の人から学んだこと〕

09 プレッシャーに効く魔法の言葉「自分らしく」〔知事就任時の思い〕

10 食って寝れば、後はなんとかなる〔演習経験談から〕 ほか5項目

第2章は「人を知る」・・・村井君の「人付き合いの考え方」を

11 第一線で活躍する人に共通するのは謙虚さ（羽生結弦選手や「嵐」のこと）

12 「素直な心」で物事を見る〔松下幸之助氏言から〕

17 信頼せねば人は実らず〔山本五十六聯合艦隊司令長官言から〕

20 くやしさを乗り越えて強くなる〔上級生の理不尽な指導で〕 ほか7項目

第3章は「仕事を知る」・・・村井君なりの「仕事への考え方」を

22 足元だけ見ていないで全体を俯瞰する〔ヘリパイ視点で〕

23 「遠方目標」と「中間目標」を定める〔空の飛び方から〕

25 対立しつつ調和する〔松下幸之助氏言から〕

26 人生は失敗の連続〔有名な松本復興大臣との会談事件から〕

28 「鬼十則、裏十則」〔(株)電通第四代吉田秀雄社長遺訓から〕

31 天命に従って人事を尽くす〔著者の座右の銘〕 ほか5項目

第4章は「術を知る」・・・「自衛隊等で学んだ経験から仕事に役立つ具体的な方法、ノウハウ」を

33 仕事に必要な四つのポイント「適・先・並・完」〔自衛隊式論理的思考〕

35 「自分ならこうする！」を常に考える〔飛行隊経験談から〕

36 報告は簡潔に、わかりやすく、結論から〔自衛隊式報告要領で〕

38 不測の事態に狼狽えない呼吸法〔土田國保学校長講話から〕

43 「雨が降れば傘をさす」〔松下幸之助氏言から〕 ほか7項目

各項目の末尾の〔 〕内は、推薦者の補足であるが、全44項目のヒントは、すべて知事自身の体験から導き出したものである。

例えば「43 雨が降れば傘をさす」は「雨が降れば雨衣を着る」と読み替えると雨衣を着たがらない防大生には耳の痛い話ではあるが「雨が降っているときに傘もささずに歩いていると風邪を引いてしまいます。無理をすると必ずどこかにしわ寄せがくるものです。(中略) 考えも及ばない大雨が降ることを常に考えながら準備をし、いざというときには無理をせず嵐が過ぎ去るまでじっと待っていられる体力をつけておくことが人生には必要なのです。」と知事1年目に無理をして入院した失敗談を紹介している。

これ以上詳しく本書の内容を紹介すると、読んだ時の面白味を半減させてしまうので、以下、著者である村井君の人となりを中心に紹介する。

彼は、防衛大学校及び自衛官出身者では初の都道府県知事。1期目に岩手・宮城内陸地震、2期目に3.11を経験した。現在の姿から想像できないが、実は彼は幼少期からずっと、まさに「自信がない人」だった。防大時代もそうだった。同期の間でも彼がどうして政治家になったのか、知事になれたのかわからないという意見が多数。同期からは「アイツ、いつもオドオドしてたよな」なんて言われることもあるくらい。

そんな彼が政治を志し、現在の立場に至るまでの経験を踏まえて、どうやって変わり、難局を乗り越えてきたかわかりやすくまとめ

てある。特に若い人たちやこれから先に不安を持っている人たちに、なにかの役に立てればという彼の想いが込められている。100%知事の自筆。知事の考えや伝えたいことが、自身の言葉で書かれている。この本の村井知事の印税は、1冊目2冊目と同様、全額辞退され社会貢献活動へ寄付する。

出版秘話

この出版は、村井君が講演した小原台クラブ新年会の懇親会で、出版社に勤務する同期に「自分はすでに2冊書いてるから、次はキミのところで出すよ。」と言ったことがきっかけだったが、これを本気にした同期が社内を取り纏めて、講演を企画した同期を通じて村井君にメールで打診したら「あれは冗談だった!？」と。当然「社内調整したのに冗談じゃ済まない!」と大激怒したので「とりあえず会います。」ということになり、出版社の編集長と役員を連れて宮城県庁に参上したところ、会った途端に「書きます!」と観念したそうだ。28期の3人が協力して出版することから、知事の書きたいことを思い切り書いてもらおうと図り、現職知事としては異例の自己啓発本になったが、多忙な知事の代わりにゴーストライターを使うことになり何度もインタビューして原稿まで作成したのに、あまりに知事が入れ込みすぎて最終的に全部知事が書き換えてしまい「こんなことなら、最初から自分で書くんだった!」と。。。一同啞然!としたそうだ。

同じ釜の飯を食べた防大の同期ならではの遠慮のないやり取りがあって出版に漕ぎ着けたが、正真正銘防大28期の絆が創り出した1冊である。

知事としての真面目な逸話

- ・地縁血縁の無い宮城で立候補し最下位で当選した県議1期目で「1票の格差問題」が発生した。その際、自分の選挙区をどう見ても減らさなければならぬと判断して申し出た。当然、県議達から「次の選挙で落ちろぞ」と言われ驚かれたが、2期目はしっかり上位2位で当選した。
- ・知事当選後、メーカー誘致のため東北道に「大衡インター」を新設する必要があった。その資金を賄うために「住民税を増税すべき」との周囲の声を押し切って、支持基盤である大企業の法人税にさらに上乘せして徴収する「みやぎ発展税」を導入した。
- ・知事は、県の収支が良くなかったことから、任期中の退職金を廃止する条例を全国で初めて提出・制定した。
- ・知事1期目から、「富県みやぎ」というスローガンを掲げて県の収入構造改革（従来第2次産業が弱かった）と収支改善に尽力している。

推薦者コメント

「普通に大学受験して偶然あるいは運命的に合格して入学したのが、たまたま防衛大学校であった普通の高校生が、四年後には一国の首相に宣誓し、高級幹部自衛官への進路をもらえること自体スゴい強運である。

「自分に自信がない」と悩む四年生や要員区分で悩む一年生も、「若いうちの苦労は買ってでもやれ!」「天命に従って人事を尽くす」と言ったヒントを与えてくれるこの本を読んで少しでも前向きに考えられたらと思い推薦する。自分らしく「普通」に自信を持って生きれば良い。防大の絆を大切に、与えられた天命〔要員〕に従って一所懸命頑張って、結果各々自分に合った形で国家に奉仕できれば、それで充分!」と私は思う。

なお、著者の村井君は本書の印税を社会貢献のために寄付することになっているので、学生諸君には寄付のつもりで購入して読んでいただければ推薦者としては有り難い。

【お年玉】村井知事からの檄文

最後に、村井嘉浩知事（28期陸上・機械工学・射撃部）から後輩の学生諸君へ激励のメッセージをいただいたので紹介する。

後輩の皆様へ

この度、私の拙著が教官推薦図書になりました。心より感謝申し上げます。

防大生の中には自分に自信がない方もおられると思います。実は私もそういう人間でした。当時から口だけは達者（笑）でしたが、体力もなく、取り柄と自慢できるものが何もありませんでした。

卒業直前、当時の小隊指導官に「死ぬかもしれない任務に就くと部下に命令できるかどうか分からないので、幹部自衛官になる自信がない」と相談したことがありました。卒業後20年ほど経ってから、相談した小隊指導官にお目にかかったら、私が真剣に悩み相談したときの様子をよく覚えておられました。

印象に残るほど悩んでいたのだと思います。その後、指導官のご指導の甲斐もあって、幹部候補生学校に入校し自衛官になりました。

運命のいたずらによって、あの東日本大震災時に被災県知事として県庁を差配し、あらゆる機関と調整することになりました。

私は防大卒業後8年間（1等陸尉）で退官しましたが、防大の4年と自衛官の8年間で培った体験が非常に役に立ちました。

今、人生を振り返り自衛官生活を送って本当に良かったと思っています。

本書は自衛官生活等で私が得たことを簡単にまとめたものです。

読みやすいように工夫しました。是非お手にとって下さい。

皆様のご健闘を先輩の一人としていつでも暖かく見守っています！

防衛大学校 28期

宮城県知事 村井 嘉浩

※図書館所蔵図書の請求記号と配架場所
(近日配架予定)



～図書館からのお知らせ～

1：総合情報図書館 閲覧カウンタースタッフ紹介

いつも総合情報図書館をご利用いただきありがとうございます。

総合情報図書館の閲覧カウンターで働いているスタッフについて、簡単ながら紹介させていただきます。

総合情報図書館では、閲覧(カウンター)業務を部外に委託しており、閲覧カウンターで実施する窓口業務は部外委託によるスタッフが担当しています。また、一部のスタッフは司書資格を持っています。

利用者の皆様とかかわることでは、図書の貸借以外にも研究個室、グループ研究室及びAVコーナーの利用窓口、館内で利用

できるノートパソコンの貸出し、総合情報図書館の利用に関する案内(リファレンス)などを実施していますので、図書の配架場所がわからないといったことなど図書館の利用に関してお困りの事があれば受付カウンターまでお問い合わせください。

これからも利用者の皆様の利便性の向上を図るよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。

図書館閲覧カウンタースタッフ一同
(青木・千葉・茅野・伊藤・坂東・進藤)



2：第4回ビブリオ競技会の実施

平成28年12月22日に、「第4回ビブリオ競技会」を記念講堂において実施しました。

競技会主題「知性と涵養」・副題「十年後の自分に贈る本」として、学生の読書に対する意欲を昂揚し、知性の涵養と教養の充実を図ること等を目的とし、第1部門「仲間」第2部門「生と死」の2ジャンルでの大隊による対抗形式をとり、各ジャンル発表後に投票を行い、合計得票数により順位を決定しました。

熱戦の結果は以下のとおりです。

順位	大隊	書名・著者名	得票数
1	3大隊	『群衆心理』 ギヤスターヴ・ル・ボン 発表者:志賀 慎太郎 学生	5,143
		『何もかも憂鬱な夜に』 中村 文則 発表者:藤澤 宏司朗 学生	
2	1大隊	『中核 VS 革マル』 立花 隆 発表者:輪湖 丈真 学生	5,070
		『精霊流し』 さだまさし 発表者:土田 魁皇 学生	
3	4大隊	『英霊の絶叫』 船坂 弘 発表者:加藤 雄志 学生	5,005
		『帰還兵はなぜ自殺するのか』 デイヴィット・フィンケル 発表者:小林 大悟 学生	
4	2大隊	『鋼鉄都市』 アイザック・アシモフ 発表者:渡邊 優一 学生	4,783
		『不毛地帯』 山崎 豊子 発表者:小林 那帆 学生	

今年度は、第3大隊が総合的に最多票を集めて優勝し、学校長から顕彰板等を授与されました。

また、「仲間」志賀慎太郎学生、「生と死」土田魁皇学生が表彰を受けました。



(写真は國分学校長より顕彰板を受ける優勝3大隊の志賀学生)

3：平成28年度「防大生の、防大生による、防大生のための1冊」年間上位表彰

総合情報図書館では本年度も、各大隊が推薦する本と所感文を選抜し、全学生に学内メールでの投票を実施しました。年間5回の配信をし、合計20冊の中から以下の年間得票数上位5冊を選び、3月15日に表彰を行いました。

回	図書推薦者	書名・著者名
1	2学年 牧山 毅海	『大戦略の哲人たち』 石津 朋之
2	3学年 上田 哲郎	『世界の士官学校』 太田 文雄
4	4学年 青野 宗玄	『リーダーを目指す人の心得』 コリン・パウエル
5	2学年 市川 佳樹	『完全な人間を目指さなくても良い理由- 遺伝子操作とエンハンスメントの倫理-』 マイケル・J・サンデル
優秀賞	2学年 平田 健志	『米軍式 人を動かすマネジメント』 田中 靖浩

※第3回は1位が訓練必携書であったため除外

※優秀賞は各回の次点者のうち最多得票数

4 : TOEIC コーナーについて

学生の英語力向上のため、学習関連書籍を集めた TOEIC コーナーを図書館入り口付近に新設しました。学習用 DVD もあり、AV コーナーにて視聴することも出来ます。是非活用して下さい。



編集後記

その昔、大学の図書館で書庫整理のアルバイトをしていた。整理を依頼された一角には、満州の歴史資料のようなものとか、一時期流行した思想に関する戦前の研究書とかが積まれており、破損しそうな本に悪戦苦闘しながら、知的な営みの移り変わりというものを体感できたような気になり、奇妙な喜びを覚えた。そのような感覚を何となくでも分かってくれる方には、本学の図書館にも、そういう感覚を味わえるポイントが少なくないので、探索してみることをお勧めしたい。

編集委員長 山中 倫太郎

NADAL Bulletin Vol.31, No.2

防衛大学校図書館だより 2017. 3. 15

発行及び発行人

防衛大学校 総合情報図書館

館長 武藤 功

編集委員

山中 倫太郎 (公共政策学科)

松村 徹 (応用物理学科)

由良 富士雄 (統率・戦史教育室)

編集庶務

大堀 亘 (総合情報図書館事務室)

櫻井 貴夫 (総合情報図書館事務室)

連絡先

〒239-8686

神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校 総合情報図書館事務室

「図書館だより」事務局

Tel. 046-841-3810 FAX. 046-843-3818